

# 筑後市内遺跡群

筑後市大字上北島・大字藏敷所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第20集

1999

筑後市教育委員会

# 筑後市内遺跡群

上北島前田遺跡第1次調査  
藏数森ノ木遺跡第2次調査



1999  
筑後市教育委員会

# 序

この報告書は、平成元年度に行った、上北島前田遺跡と藏数森ノ木遺跡の調査の成果をまとめたものです。調査から数えて10年目にやっと報告書としてまとめることができました。

この10年間、当市の文化財行政は大きく変わりました。埋蔵文化財の調査量も激増し、専門職員も当時の嘱託1名から正規職3名嘱託2名の合計5名に増えました。しかし、報告書の刊行や、その他の文化財保護に関しては、これからといったところです。

今後は、それらの業務にも重心を移しながら、文化財保護行政を邁進して行くつもりです。この報告書が各方面で些少なりとも活用されれば、望外の喜びです。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、ご助力ご協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

筑後市教育委員会

教育長　牟田口和良

# 例　言

1. 本書は平成元年度に調査を行った「上北島前田遺跡第1次調査」と「藏敷森ノ木遺跡第2次調査」の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査および出土遺物の整理等は筑後市教育委員会がおこなった。調査関係者は第Ⅰ章に記したとおりである。なお、出土遺物・実測図・写真等は筑後市教育委員会において収蔵・保管している。
3. 本書に使用した図面のうち、遺構実測図は永見秀徳、井上（調査時 下川）まき子、光延久幸が、遺物実測図は平塚アケミ、末吉隆弥が作成した。また、製図は平塚、江藤玲子がおこなった。
4. 本書に使用した遺構写真・遺物写真是永見が、空中写真是街空中写真企画が撮影した。また、遺物写真的撮影にあたっては上村英士の協力を得た。
5. 本書での報告にあたり、遺構番号を次のように決定した。調査時につけた仮番号を生かし、頭に調査次数、遺構種別を加えた。つまり第2次調査のS-1が竪穴住居であった場合、2SI01となる。
6. 本書に用いた方位はすべてM.N.を、水準はT.P.を基準としている。なお、遺構の主軸等の方位は実測図上で分度器を用いて計測した。北から45° 東にあたる場合、N-45°-Eと表記した。
7. 本書の執筆は、第Ⅱ章を末吉、その他を永見が担当した。また、編集は永見が行なった。

# 目次

第Ⅰ章 はじめに .....	1
第Ⅱ章 位置と環境 .....	2
第Ⅲ章 上北島前田遺跡第1次調査の成果 .....	8
(1) 遺構 .....	
(2) 遺物 .....	
(3) 小結 .....	
第Ⅳ章 藏敷森ノ木遺跡第2次調査の成果 .....	15
(1) 遺構 .....	
(2) 遺物 .....	
(3) 小結 .....	

# 第一章 はじめに

本書は平成元年度に発掘調査を行った、2遺跡の調査成果を収録している。それぞれの調査について、概要を以下に記す。

## 上北島前田遺跡第1次調査

宅地造成の事前調査として丸福観光株式会社から委託をうけて実施した。調査地点は筑後市大字上北島字前田486-1番地外で、調査面積は1,200m<sup>2</sup>である。調査は平成元年7月25日から同年8月14日までおこなった。

## 蔵敷森ノ木遺跡第2次調査

筑後北中学校のテニスコート新設の事前調査として実施した。調査地点は筑後市大字蔵敷字森ノ木703番地外で、調査面積は300m<sup>2</sup>である。調査は平成元年11月20日から同年11月25日までおこなった。

なお、調査組織は両調査に共通で以下のとおりである。

### (現地調査 平成元年度)

総括 筑後市教育委員会 教育長 中島 栄三郎（平成元年9月30日まで）  
森田 基之（平成元年10月1日から）

庶務 社会教育課長 江里口 充  
社会教育係長 松永 盛四郎  
社会教育係 高井良 宜懶衣  
　　々 光延 久幸（文化財担当）

調査担当 文化財学芸員 永見 秀徳

### (整理作業 平成10年度)

総括 筑後市教育委員会 教育長 車田口 和良  
教育部長 下川 雅晴

庶務 社会教育課長 山口 逸郎  
社会教育係長 田中 清通  
社会教育係 田中 剛（文化財担当）  
小林 勇作（文化財専門職）  
上村 英士（　　々　　）  
立石 真二（文化財学芸員）  
柴田 剛（　　々　　）

調査担当 文化財専門職 永見 秀徳

なお、発掘調査前の協議から、現地調査、報告書作成に到るまで、次の方々から貴重な御助言、御指導をいただいた。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

右田乙次郎（故人、調査時 筑後市文化財専門委員会々長）、佐田 茂（佐賀大学）、宮小路賀宏（九州歴史資料館）、川述昭人・佐々木隆彦・小田和利（以上、福岡県教育庁）、赤崎敏男（八女市教育委員会）、萩原裕房・古賀正美（以上、久留米市教育委員会）、山本信夫・狹川真一・山村信榮（以上、太宰府市教育委員会）、古賀信幸・古賀真木子（以上、山口市教育委員会）、村川俊明（京都府精華町教育委員会）

# 第Ⅱ章 位置と環境

## 1：筑後市の位置関係

福岡県南部から佐賀県東北部に広がる筑紫平野は、筑後川中流域の両筑平野、下流域右岸の佐賀平野、左岸の筑後平野に区分されている。また、その川自身が造りだした低平な地形と肥沃な土壤、豊かな水資源に恵まれて古くから活発な人間生活が営まれてきた地域である。

筑後市は、筑後川と共に筑後平野を流れる有力河川である矢部川の中流右岸に位置しており、筑後平野のほぼ中央にあたる。東は八女市、八女郡広川町、北は久留米市、三瀬郡三瀬町、西は三瀬郡大木町、南は山門郡瀬高町、同三橋町に隣接している。市の中央を南北にJR鹿児島本線と国道209号線が、東西に国道442号線が貫き、両者が市の中心部山ノ井で十字に交差している。周辺都市との直線距離は八女市5キロ、大川市11キロ、久留米市12キロ、大牟田市20キロ、福岡市45キロである。

## 2：自然環境

筑後市域内の地形は八女市から延びる「八女丘陵」と呼ばれる洪積台地と、扇状地性低地で大部分を占めている。

赤坂、久塚、大和地区的旧洪積台地は標高30mから40mで、市域内では最も標高の高い地域である。上原々、熊野、前津、羽犬塚などと、蔵敷西端、久富、高江などの櫛歯状に西へ突出した新洪積台地は、標高15mから20mの階段状地形である。山ノ井川以南の藤島、和泉、長浜、山ノ井、野町から尾島に至る地域は、標高10mから15mの低い台地となっている。市域東南部の地域から矢部川北岸の常用、木田地区は扇状地性低地である。市域西部の三角州性低地は大部分が水田であり、標高4mから7mの低平な地形である。

気候について見てみると、筑後市は九州最大の筑後平野東南部に位置し、有明海に注ぐ河川を有するが、内陸性気候である。

有明海はそもそも特異な内湾であり、外洋の海流の影響が少なく、海洋性気候の持つ穏和な特徴は見られない。このため夏は暑く冬は平野であるが寒いという、典型的な内陸性気候を有するのである。

降水量については、6、7月の梅雨期に多いが、台風襲来期は場合によっては梅雨期より多いこともあります、偏異率が高い。また冬季の降水量（降雪量含む）は少なく、更に夏期の降水量は非常に不安定である。夏期は水稻耕作にとって最も水が重要な時期であるが、殆ど降らなかったり、また降りすぎたりという水害が水田灌漑用水供給の不安定性を生じさせた。これが花宗、山ノ井両河川という独特的の水利慣行を生み出すのであるが、これについては後述することにする。

## 3：社会環境

平成10年4月末現在の市総人口は46,475人である。この数値は今後更に増加する傾向にある。筑後地域で現在人口の増加している市町村は久留米市、小郡市、広川町、そして筑後市の4つであり、他は減少が著しい。更に筑後市内では市北部、北東部の増加率が著しい。この地区は久留米市、福岡市への通勤者が多い地域であり、久留米市、福岡市のベッドタウン化が現れてきているとみることができよう。

次に産業構造について触れてみることにする。筑後地区は福岡県下では最も農業の盛んな地域であり、その中に位置する筑後市、八女市は田園都市的性格が強い。しかし、全国的にみられる農業従業者数の減少に伴って、ここでも減少が見られるが、それでも全国平均の2倍強である。

市内の主要農産物の粗生産額は、第1位は「イチゴ」で、「米」、「鶴卵」、「ブドウ」、「ナシ」と続く。

しかし、米の生産は年々減少傾向にあり、変わって野菜類、果物類が増加している。これは、減田政策に伴うビニルハウス等の施設園芸への移行が主要因である。

筑後地方の特産品の一つに「八女茶」がある。生産される八女茶の種類は玉露、てん茶、かぶせ茶、煎茶であるが、筑後市内で生産される種類はその殆どが煎茶である。しかしその殆どが零細経営状態であり、茶栽培農家の減少が続いているのが現状である。

八女茶と並び筑後地方の特産品の一つに「い草」がある。筑後市は筑後平野でのい草の発祥の地であり、文禄元年（1592年）に大正院僧師によって伝えられた。現在の生産量は熊本県に次いで第2位であるが、安価な輸入品の増加と住宅建築方式の変化に伴い、今後の見通しは決して明るくない。

商工業に目を向けていくと、昔は筑後地方の農林業を背景とした工業（精米、製粉、疊、木材等）を中心で、余剰労働による伝統工業（和紙、久留米絣等）が副業的に行われていた程度であった。

筑後市に近代的産業が根付き始めるのは八女インター開設後である。自動車輸送に依存した広域市場指向の工場（食料品、エレクトロニクス等）が数多く建設されるようになり、この数は今後更に増加する傾向にある。また、近隣の大川市の地場産業である家具企業が交通の便利によって多数の卸売り場を立地している。

発達する工業に対し、商業はあまり好ましいとはいえない。これはJR等の便利で発達した交通手段のために、福岡市の商圈に包囲されるためであろう。しかし、人口の増加に伴って市中心部の国道沿線及びその周辺にスーパーや大型店舗の立地が増加しており、今後の発展が期待できる。

## 4：歴史環境

### ・旧石器時代

筑後平野は「筑後川の脇」であり、この肥沃な台地には古から人々が暮らしていた地域である。この筑後地方で今まで旧石器が発見された場所、遺跡は60ヶ所を超えており、しかし、明確な旧石器包含層から検出された遺跡は皆無に等しく、大半が表採か、後世の遺構への混入品である。筑後市内域でも残念ながらこの旧石器時代に関しての遺跡は検出していない。しかし、表採等では藏敷坂口遺跡G地点より、角錐状石器が1点出土しており、大古のこの地に人類がいた確かな証拠といえるだろう。

### ・縄文時代

旧石器時代以降、そして、弥生時代が始まるまでの間、縄文土器が使用された時代を縄文時代と呼ぶ。時代的には約10,000年前から2,400年前であり、これは世界史的に見ると新石器時代に相当する。更に地質学上では洪積世から完新世へ移行する時期が約10,000年前といわれており、縄文時代の始まりと一致するのもおもしろい。

市内域におけるこの時代の遺跡としては、長崎の「坊田、空山、石塚遺跡」、尾島の「裏山遺跡」があげられる。

### ・弥生時代

国家の胎動たる時代で、約2,200年前から1,800年前の時代を弥生時代と呼ぶ。水稻耕作技術や鉄、青銅といった金属器の伝来、定型化した土器（弥生土器）の使用等、新技術が渡来人によってもたらされ、新しい生活様式と共に人間社会の基盤が築かれた時代である。

市内域におけるこの時代の遺跡は縄文時代に比べると徐々に増加する。またその殆どが市の南部に分布する。おそらくは水田耕作に伴い、より河川に近い所に住み着いたのである。中期後半になると、市内域にまんべんなく遺跡が分布するようになり数も飛躍的に増加する。水稻耕作も定着し人口も激増、更に階級社会の萌芽が窺える。これら全国共通の現象は筑後市でも調査により明らかであり、うかがい知ることができる。

後期になると新しいムラの形成はあまり見られなくなる。これは、当時の技術で新しくムラを形成できる場所が無くなってきたのである。しかし、この時期には建築用法に掘立柱建築などの新技法が見

られるようになる。また丹塗りした祭器が多数出土するようになり、シャーマンなり族長なりを中心とした集団社会の確立をうかがい知ることができるようになる。

この時代の市内域の遺跡には常用の「常用遺跡群」、「梅島遺跡」、上北島の「上北島平塚遺跡」、尾島の「裏山遺跡」、水田の「山伏遺跡」、藏敷の「藏敷遺跡群」「藏敷森ノ木遺跡」、下北島の「下北島久代遺跡」等多数の遺跡が上げられる。

#### ・古墳時代

古墳と呼ばれる高い盛り土を持つ墳墓が多数造られ、この特異な現象に象徴される時代を古墳時代と呼ぶ。八女丘陵にも多数の古墳が築造される。筑後市内域でもこの丘陵地に阿蘇凝灰岩を素材とする武装石人や、直弧文を飾った家型石棺を有する「石人山古墳」、珠文鏡や馬具等を出土した「瑞王寺古墳」、他に「千人塚古墳」、「欠塚古墳」等があげられる。

この時代のムラの生活は弥生時代とさほど変わらないが、5世紀にはいると住居端に「カマド」が造られるようになる。また使用される土器に朝鮮半島より伝わった「須恵器」が使われるようになる。この時代の市内域の遺跡としては藏敷の「藏敷森ノ木遺跡」、常用の「梅島遺跡」、上北島の「狐塚遺跡」、西牟田の「田佛遺跡」、高江の「高江遺跡」、欠塚の「前津塚山遺跡」等があげられる。

#### ・奈良時代

律令制が確立されてから、784年に長岡京に遷都されるまでの間、奈良に都が置かれた時代を奈良時代と呼ぶ。この時代は天皇を中心とした国家的統一と中央集権的支配が確立された時代であり、九州にも大宰府が置かれ、大動脈たる官道として西海道が造られる。

近年の調査により、筑後市内からも西海道の一部が発見されており、ほぼ市の中央を南北に縦断する事が確認された。更に、「延喜式」に見える「葛野駅」は、筑後市内にあったと推測されている。また、筑後という地名（国名）が歴史に初見するのもこの時代である。この時代の筑後市内の遺跡としては前津の「前津中ノ玉遺跡」、若菜の「若菜森坊遺跡」、羽犬塚の「羽犬塚中道遺跡」、「羽犬塚射場ノ木遺跡」、和泉の「井原口遺跡」等があげられる。

#### ・平安時代

桓武天皇による平安京遷都から鎌倉幕府が成立するまでの390余年を平安時代といふ。際限のない増税のため口分田の維持が不可能となり、三世一身の法、墾田永年私財法が打開策として採られるが、これによって公地公民制は崩れ、新たに荘園が成立する。この荘園制は貴族や社寺のみを利するようになつたが、荘園こそがこの時代の特徴といつても過言ではないだろう。

この時代の筑後市内においては荘園の存在は、今のところ明らかではない。この時代の筑後市内域の遺跡としては、「鶴田市ノ塚遺跡」、「高江柳遺跡」、「井田堀越遺跡」等があげられる。

#### ・中世（鎌倉・室町・戦国時代）

筑後市は平家とのゆかりの深い地域である。1185年の壇ノ浦で完敗した平家の残党や、元九州鎮定の役人であった平宗清らが落ち延びてきたといふ。その後1192年、源頼朝によって鎌倉に幕府が開かれ武士による政治が始まる。筑後市内においてはこの鎌倉期の1226年に水田天満宮が創建される。これに属する荘園として、現在の筑後市下妻、馬間田、富安一帯の下妻荘、並びに天満宮近辺水田の水田荘が、また北部では上妻郡の広川荘がそれぞれ成立する。

1333年、鎌倉幕府は滅亡し、後醍醐天皇による建武の親政が開始されるが、3年後には足利尊氏により室町幕府が開かれた。これより南北朝の争乱が始まる。

この当時、筑後市内では水田荘と隣接する広川荘の間で激しい境界争いが行われた。文献に現れるのは北水田蓮信と大鳥居信高の間で行われた争いが最初である。結局これは1339年に和解をすることを合意している。1369年、信高が境界付近に老松社を造立しようとしたところ、広川荘の熊野神社の神官らが出向いてきて妨害を働いたことをきっかけとして一段と争いが激しくなる。この争いは1381年、大鳥居龟松丸の雜掌貞蓮と広川荘の地頭代光顕の間で和解がなされ、ようやく境争論について和解が成立する。

この時代の市内城の遺跡としては「長崎坊田遺跡」、「熊野屋敷遺跡」、「藏数赤坂遺跡」、「島田外屋敷遺跡」、「井田西中野遺跡」、「上北島前田遺跡」があげられる。

#### ・近世（秀吉の天下統一から江戸時代）

豊臣秀吉により長く続いた戦国の動乱は平定され、全国が統一されることにより時代は近世にはいる。当時の筑後市内域は太閤国割によって分割され、上妻郡の一部が久留米城の小早川秀包の、下妻郡は柳川城の立花統虎（後の宗茂）の支配下に入った。新しい支配体制下に入った市域内ではあるが、1600年の関ヶ原の戦いで西軍にいた筑後地方の諸大名達はそのいずれもが改易され領地を没収された。

変わって入国してきたのは田中吉政（前岡崎城主）である。吉政は筑後一国を与えられ地元との結びつきの強化に努めたが62歳で病死、更にあとを継いだ忠政も江戸へ急死し、筑後国は全て欠国となってしまう。空白間は代官衆が仕置したが、1620年に立花宗茂、有馬豊氏の転封によって再び分国され、以後1871年の廃藩置県までこの両藩による統治体制は併立していく。この分国によって下妻郡（旧下妻莊）内の村落が分国され、最大の水資源たる矢部川の水利権の争奪を巡り激しい争いが行われることになる。

前述したようにこの筑後平野は肥沃な土壤を持ちはするが、河川水利に乏しく農業用水の確保が難しかった。そこでこの時代、用水の確保のため幾つかの人工河川、溜池が造られる。筑後市内にも「花宗川」、「山ノ井川」等の人工（半人工）河川や西牟田の溜池、千間溝等が造られた。木田天満宮に現存する石造大鳥居は花宗川の完工を祈願して1614年に田中忠政が寄進したものである。

またこの当時、筑後市を通る薩摩街道（坊津街道）の羽犬塚（筑後市大字羽犬塚）に宿場が設けられ、宿場町として発展した。またこれを背景に製紙業（溝口紙）や焼き物（田中焼・木田焼）、鑄物業（平井鉄物師）等の産業が振興した。

この当時の筑後市内城の遺跡としては、「高江キレト遺跡」、「鶴田丸遺跡」、「若菜大堀遺跡」、「四ヶ所古四ヶ所遺跡」等があげられる。また倒幕運動家として名高い真木和泉守が謫居を命じられ幽閉されていた「山梶窓」（木田）が現存している。

## 5：民俗環境（市内の祭り）

正月5日に行われる祭りとして熊野神社の「鬼の修正会」と呼ばれる火祭りがある。これは久留米市の「鬼夜」と共に、筑後の二大追儺祭として特筆できるであろう。

この行事の歴史は古く、1492年の『法会次第書』の中に、「正十日鬼修正」を見ることが出来る。元々は筑後市内域にあった坂東寺の祭りであったが、明治の排仏棄釈によってこれが廢寺とされたため、つながりの深い熊野神社に移り現在に至っている。尚この行事は昭和44年に県の無形民俗文化財に指定された。

毎年8月14日に行われる盂蘭盆の行事として、久富の「盆綱曳き」の奇祭が継承されている。これは、地獄に堕ちた亡者達に盆の間だけでも楽しく過ごしてもらおうと綱をひきまわすもので、久富の熊野神社を起点として行われる氏子の子供達による伝統行事である。

全身に煤を塗り付けた子供達は、腰に藁で編んだミノ、頭には角に見立てた縄の鉢巻きをつけた子鬼の出で立ちで大綱を引き吊り、「ワッショイ、ワッショイ」のかけ声で地区内を練り歩く珍しい行事である。1626年、久富の徳隨寺住職が仏教古事に習って始めたといわれている。その後、寛永の大飢饉で大量の死者を出したことから現在の形になったという。平成8年より、県の無形民俗文化財に指定された。

前述した木田天満宮にも数多くの祭りがある。最も有名なのは毎年8月25日に行われる「千燈明」であり、昭和35年に県の無形民俗文化財に指定されている。これは五穀豊穣祈願の祭りとして行われるもので、夕方の「裸ん行」、「汐井かき」と、日没後の「提灯行列」、「千燈明」、「花火打ち上げ」の一連の行事のもとに運営がなされている。この行事の起源については明らかではないが、約700年前、氏子が五穀豊穣を祈って帆立貝の貝殻に菜種油を入れた灯明を奉納したのが始まりとされている。幻想的な千燈明と現代的風流の一致した、県下でも代表的な祭りであろう。

その他にも溝口の竈門神社の千燈明祭や数多い稚兒風流、各寺社の祭りや、地域住民と地方自治体が一緒に開催する「ちっこ祭」など、歴史、規模は様々に多数の祭りの行われる場所である。

#### 参考文献

- 「梅島遺跡」筑後市教育委員会 1992年  
筑後市文化財報告書第6集 「蔵敷遺跡群」筑後市教育委員会 1990年  
筑後市文化財報告書第3集 「瑞王寺古墳」筑後市教育委員会 1984年  
筑後市文化財報告書第8集 「欠塚古墳」筑後市教育委員会 1993年  
筑後市文化財報告書 「狐塚遺跡」筑後市教育委員会 1970年  
筑後市文化財報告書第5集 「田佛遺跡」筑後市教育委員会 1988年  
筑後市文化財報告書第7集 「高江遺跡」筑後市教育委員会 1991年  
筑後市文化財報告書第4集 「前津中ノ玉遺跡」筑後市教育委員会 1987年  
筑後市文化財報告書第17集 「羽犬塚射場ノ本」筑後市教育委員会 1995年  
筑後市文化財報告書第10集 「四ヶ所古四ヶ所遺跡」筑後市教育委員会 1994年  
「山梶窩」筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1979年

※ 今回報告する遺跡は、ゴシック体でその遺跡名を紹介している。

筑後市内の主要遺跡分布図 遺跡名一覧表

1 田佛遺跡	2 西牟田驚寺遺跡	3 蔵敷坂口遺跡	4 蔵敷遺跡群	5 蔵敷森ノ木遺跡
6 蔵敷赤坂遺跡	7 久富鳥居遺跡	8 猛野屋敷遺跡	9 欠塚古墳	10 前津塚山遺跡
11 高江柳遺跡	12 高江遺跡	13 前津中ノ玉遺跡	14 羽犬塚中道遺跡	15 羽犬塚射場ノ本遺跡
16 若菜多大堀遺跡	17 若菜森坊遺跡	18 長崎坊田遺跡	19 長浜鍊遺跡	
21 下北島櫛引遺跡	22 井原口遺跡	23 狐塚遺跡	24 上北島平塚遺跡	25 山梶窩
26 上北島前田遺跡	27 水田山伏遺跡	28 裏山遺跡	29 鶴田岸添遺跡	30 鶴田柄原遺跡
31 新満丸田遺跡	32 鶴田市ノ塚遺跡	33 梅島遺跡	34 常用遺跡群	

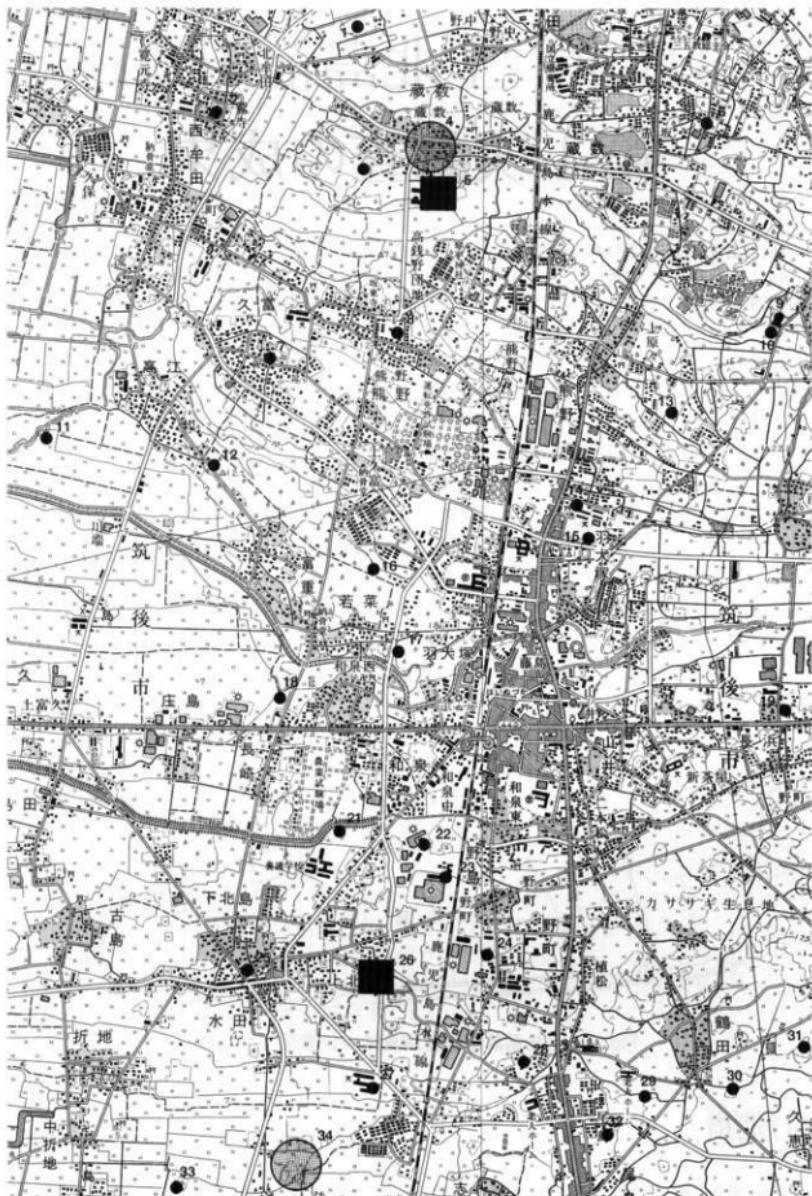


Fig. 1 筑後市内の主要遺跡分布図 (1/25,000)

# 第Ⅲ章 上北島前田遺跡

## 第1次調査の成果

今回の調査では、開発区域全域で埋蔵文化財の包蔵を確認した。しかし、北側の大きな溜まりは遺物を包含しているのみで遺構を確認できないことから、その大半を調査の対象から除外した。したがって、調査成果は南側の微高地の遺構の報告が中心となるが、遺構・遺物の順に報告する。

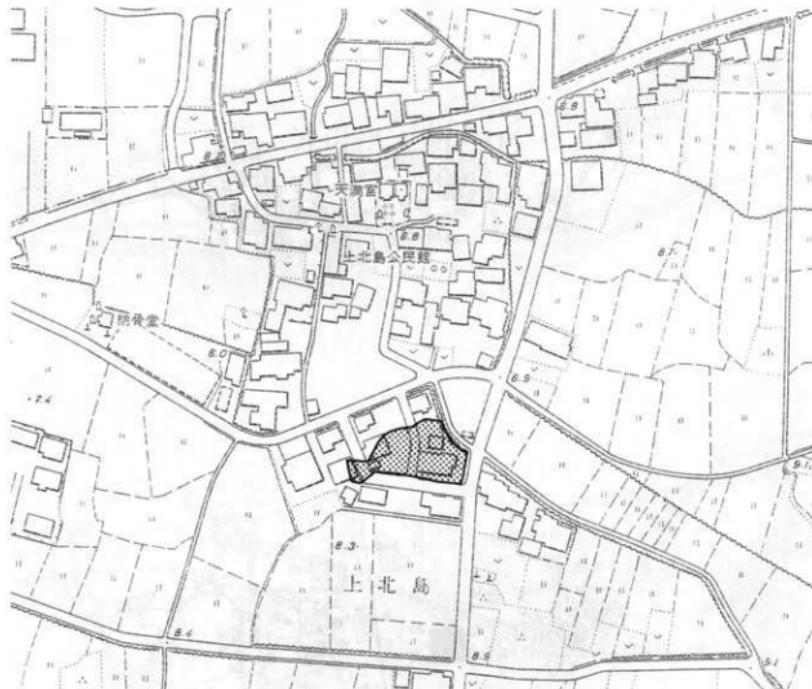


Fig.2 上北島前田遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

### (1) 遺構

今回の調査では、土壙を6基と多数の溝状遺構を確認した。以下、遺構種類別に報告したい。

### 落ち込み状遺構

#### 1SD01

調査区北側の大きな「落ち」で、全体が遺物の包含層となっている。南側の遺構面に対して1.0mの深さがある。落ち込みは南側の2mで深くなり、そこから先はほぼ平坦になる。埋土は黒色の粘土で水分が多く、沼地の跡のようである。

大半を重機で掘削したため、出土遺物は土師器の皿、青磁碗しか報告できない。

### 溝状遺構

#### 1SD05 (Pl. 2)

調査区の西端にあり、東西に走る浅い溝である。1SD15と同一かどうかは、判然としない。出土遺物に磁器がある。

#### 1SD10 (Fig. 3)

調査区のほぼ中央部北側にあり、1SD01に向かって少し開くような平面プランである。南側は0.4mと細く、北側は2.5mに開いている。深さは南側で0.2m、北側では0.5mを測り、南側の微高地から1SD01へさがってゆく状況がうかがえる。1SD01に排水を行うためのものではないかと考えられる。出土遺物に土師器、青磁がある。

#### 1SD15 (Pl. 2)

調査区のほぼ中央部北側にあり、1SD01に沿って伸びる。幅は0.5mから0.8m、深さは0.1mから0.4mを測る。底面は連続土壤状を呈する。出土遺物に土師器がある。

#### 1SD26

調査区のほぼ中央部南側にあり、東西に走る浅い溝である。出土遺物に土師器の皿、土鍋などがある。

#### 1SD45 (Pl. 2)

調査区の西半の北側にあり、1SD15の南側に沿

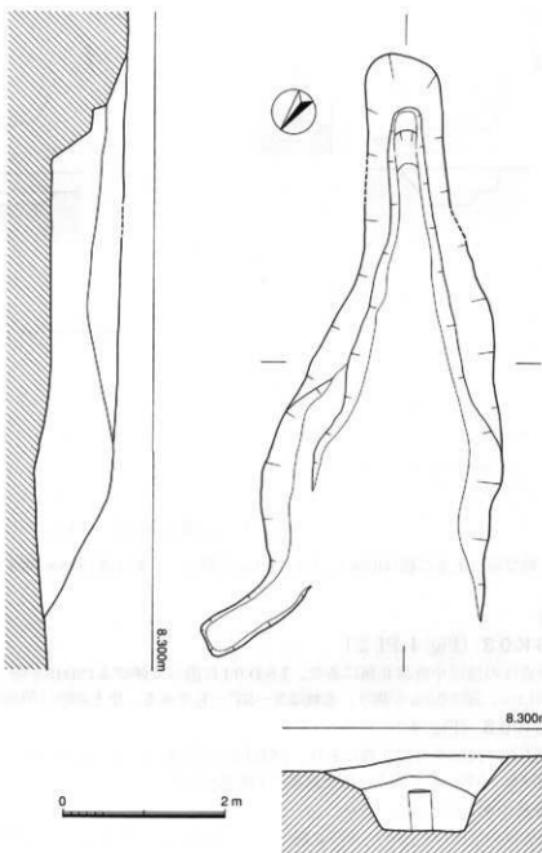


Fig.3 1SD10実測図 (1/60)

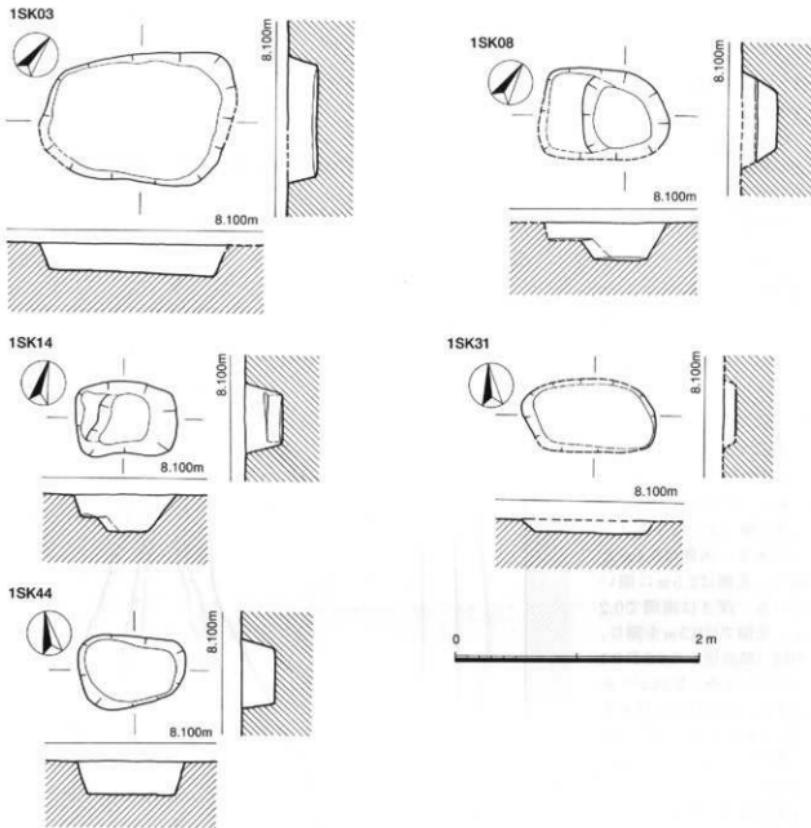


Fig. 4 土壌実測図 (1/40)

って伸びる。ともに幅は0.2m、深さは0.1mを測る。2条の溝が0.8m間隔で併走する。出土遺物はない。

#### 土壤

#### 1SK03 (Fig. 4, Pl. 2)

調査区のはば中央部北側にあり、1SD01に沿って伸びる1SD15を切って掘られている。長軸1.6m、短軸1.1m、深さ0.2mを測り、主軸はN-53°-Eである。出土遺物に須恵器、青磁がある。

#### 1SK08 (Fig. 4)

調査区のはば中央部やや東の北側にあり、1SD15に切られている。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.3mを測り、主軸はN-58°-Eである。出土遺物に土師器がある。

#### 1SK14 (Fig. 4)

調査区のはば中央部やや東の北側にある。長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.3mを測り、主軸はN-76°-Eである。西側に小さなテラス状の段がある。出土遺物に土師器がある。

### 1SK31 (Fig.4)

調査区の北東にあり、1SD15に切られてい  
る。長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.1mを測り、  
主軸はN-83°-Wである。出土遺物に瓦器が  
ある。

### 1SK35 (Fig.5)

調査区の北東にある。長軸1.0m、短軸0.8m、  
深さ0.1mを測り、主軸はN-25°-Wである。  
出土遺物に、瓦器・土師器などがある。

### 1SK44 (Fig.4)

調査区の東側にある。長軸0.9m、短軸0.6m、  
深さ0.3mを測り、主軸はN-79°-Wである。  
出土遺物に土師器の土鍋がある。

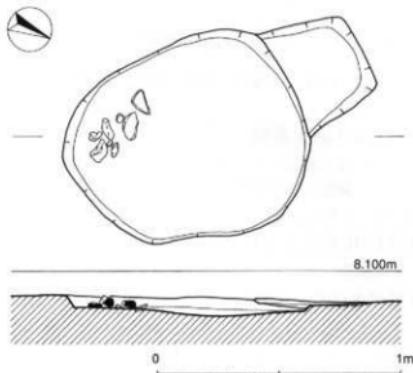
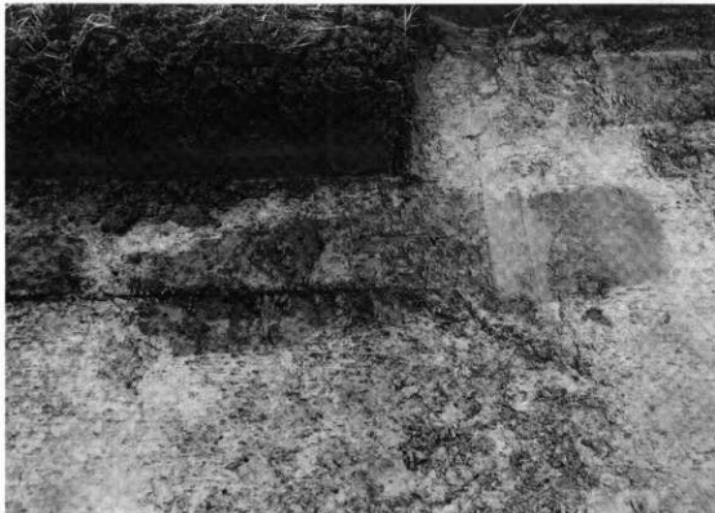


Fig.5 1SK35 実測図 (1/20)



上北島前田遺跡試掘調査時の状況

## (2) 出土遺物 (Fig.6,Pl.3)

出土遺物には、土師器・瓦器・青磁などがある。以下、出土遺構別に紹介したい。

### 1 SD 01 出土遺物

1・2は土師器の環である。1は内外面を横ナデで仕上げ、外底面には糸切り痕を残す。2は風化が激しく、調整は一切不明である。3は青磁の椀である。体部の外面に浅い鉢蓮弁がある。龍泉窯系青磁碗の1-5類である。

### 1 SD 05 出土遺物

4は磁器の椀である。体部は極めて薄い。小片のため、器形は不明である。

### 1 SD 10 出土遺物

5は土師器の皿である。厚めの底部から低く体部を引き出す。外底面に糸切り痕を残し、その他の調整は横ナデである。6は青磁の椀である。全体に薄く淡緑黄色の釉薬がかかり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともに、著しい貫入がみられる。

### 1 SD 15 出土遺物

7は土師器の土鍋である。口縁部は折曲げて玉縁としている。口縁部は横ナデ、体部内外面には刷毛目を施している。

### 1 SD 18 出土遺物

8は土師器の環である。外底面に糸切り痕を残し、その他の調整は横ナデである。

### 1 SD 19 出土遺物

9は土師器の皿である。5よりも底部は薄く、体部も強くつまんで引き出すために薄くなっている。

### 1 SD 26 出土遺物

10は土師器の皿である。厚めの底部から、緩やかに立ち上がる体部を持つ。外底面に糸切り痕を残し、その他は横ナデを施す。油煙痕が2ヶ所にあり、灯明皿として使用されていたことが窺える。11は土師器の土鍋である。器壁は厚く、逆L字状に折曲げて口縁部を形成している。口縁部上面に連続する刻目を有するが、風化が激しく採拓できなかった。

### 1 SK 03 出土遺物

12は青磁の椀である。龍泉窯系青磁I-5類である。13は

須恵器の鉢と思われる。口縁部は玉縁状に膨らみ、横ナデを施す。体部外面は横ナデ、体部内面はナ

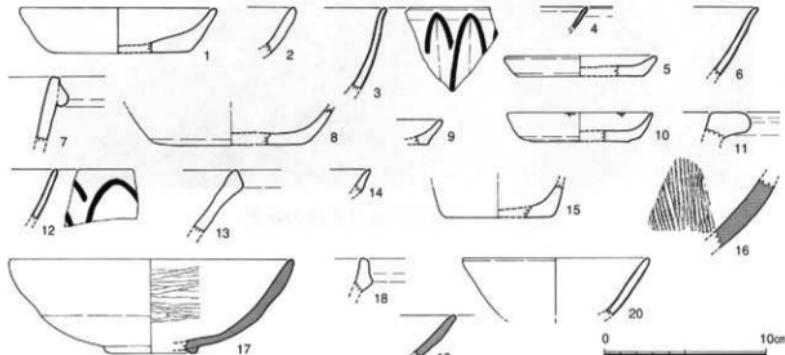


Fig. 6 上北島前田遺跡出土遺物実測図 (1/3)

No.	遺物	種類	基盤	口径	底径	高さ	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	釉上	地成	口縁部状	備考	E%	
1	ISD01	土師	片	12.2	8.5	2.8	-	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	赤茶褐色	良	ぼぼ良	わざかに外反		10	
2	ISD01	土師	片	-	-	-	-	口縁部小片	不明	不明	不明	-	淡赤褐色	ぼぼ良	不良	外上方に外反		12	
3	ISD01	青磁	碗	-	-	-	-	口縁部小片	薄く施釉	薄く施釉	薄く施釉	-	藍上淡赤褐色	良	良好	わざかに外反	やや浅い縦通有 縦通窓1-5	11	
4	ISD06	磁器	碗	-	-	-	-	口縁部小片	薄く施釉	薄く施釉	薄く施釉	-	藍上淡赤褐色	良	良好	わざかに外反	わざかに外反	16	
5	ISD10	土師	皿	9.4	2.9	1.2	-	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	淡茶褐色	良	ぼぼ良	やや不良	外上方に外反	2	
6	ISD10	青磁	碗	-	-	-	-	口縁部小片	薄く施釉	薄く施釉	薄く施釉	-	藍上淡赤褐色	良	良好	外上方に外反		4	
7	ISD15	土師	土鍋	-	-	-	-	口縁部小片	横ナデ	研毛	研毛	-	青褐色	良	ぼぼ良	折曲玉縁		15	
8	ISD18	土師	片	-	9.0	-	-	底部小片	-	横ナデ	横ナデ	横ナデ	赤切り	淡茶褐色	良	ぼぼ良		9	
9	ISD19	土師	皿	-	-	1.6	-	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	淡茶褐色	良	不良	外上方に外反		13	
10	ISD26	土師	皿	9.0	6.0	1.8	1/2	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	赤切り	淡茶褐色	良	やや軽質	外上方に外反	油煙灰2ヶ所有	8
11	ISD26	土師	土鍋	-	-	-	-	口縁部小片	不明	不明	不明	-	淡茶褐色	良	ぼぼ良	立上がり	口縁部上面に連續する 縫合目白	18	
12	ISK03	青磁	碗	-	-	-	-	口縁部小片	薄く施釉	薄く施釉	薄く施釉	-	藍上淡赤褐色	良	良好	外上方に外反	やや浅い縦通有 縦通窓1-5	5	
13	ISK03	青磁	片	-	-	-	-	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	ナデ	-	淡灰褐色	良	ぼぼ良	立上がり	こね跡か?	6	
14	ISK08	土師	皿	-	-	-	-	口縁部小片	不明	不明	不明	-	淡赤褐色	良	ぼぼ良	わざかに外反	体部断面が菱形か?	17	
15	ISK14	土師	小皿	-	6.5	-	-	底部小片	-	ナデ	ナデ	ナデ	赤切り	淡茶褐色	良	ぼぼ良	立上がり		7
16	ISK31	瓦器	碗	-	-	-	-	体部小片	焼きき?	研目	-	-	淡黒褐色	良	良好	-		19	
17	ISK35	瓦器	碗	17.5	5.6	3.8	1/4	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	内底灰褐色	良	ぼぼ良	研ぎかに	体内面のハラ磨きは 立上がり	1	
18	ISK44	土師	土鍋	-	-	-	-	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	-	暗黄茶褐色	良	良好	口縁部	立上がり	20	
19	包含層	瓦器	碗	-	-	-	-	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	へつ磨き	-	内底灰褐色	良	ぼぼ良	研ぎかに	体内面のハラ磨きは 立上がり	2	
20	表模	青磁	碗	11.6	-	-	-	口縁部小片	薄く施釉	薄く施釉	薄く施釉	-	藍上淡赤褐色	良	良好	外上方に外反	無文	14	

Tab.1 上北島前田遺跡出土遺物観察表

デ調整である。こね鉢ではないかと思われる。

### 1 SK 08 出土遺物

14は土師器の皿である。風化が激しく、調整は全く不明である。体部断面は菱形状を呈するものと思われ、所謂「へそ皿」のような器形ではないかと推察される。

### 1 SK 14 出土遺物

15は土師器の小皿の底部である。底部は厚く、外底面に糸切り痕が残る。

### 1 SK 31 出土遺物

16は瓦器の鉢である。体部の小片で、内面に櫛目が施してある。すり鉢だと思われる。

### 1 SK 35 出土遺物

17は瓦器の椀である。口縁部は横ナデにより成形するが、体部外面上には成形時のものと思われる指頭痕が残る。内面には丁寧なヘラ磨きが施されている。

### 1 SK 44 出土遺物

18は土師器の土鍋で、7と同一のタイプである。口縁部は折曲げて玉縁状にしている。

### 包含層（構造面直上）出土遺物

19は瓦器の椀である。口縁部と体部外面上、横ナデ調整を施している。内面には丁寧なヘラ磨きが認められる。

### 表面採集遺物

20は青磁の椀である。無文で全体に薄く施釉する。

### (3) 小結

今回の調査は、北側落ち込み（1SD01）の包含層部分の大半を調査範囲から除外し、調査範囲内の部分も時間的制約から重機により掘削をおこなった。そのため、この部分に含まれていた遺物は、ほとんど報告できなかった。たしかに、遺物の包含量自体は微量であったが、若干の後悔は免れ得ない。

以下、今回の調査で確認できた点や、問題点として残る点を述べてみたい。

#### 1SD01

調査区の北側に広がる落ち込み状の低地である。底面はほぼ平坦で、今回の開発範囲よりも北側まで広がっている。埋土は黒色の粘土で砂を含む。やや明るい土色の上層と、やや暗い下層に分層できたが、水平の堆積であった。このことから、埋没前は溜水があり、沼地のような状況を呈したものと思われる。ただ、北側には微高地土に現在まで続く集落があり、現在も天満宮が鎮座している。この地はかつて安楽寺の荘園「水田莊」であり、天満宮は中世末には既に現在位置に存在していたと考えてよいと思われる。そのため、この遺構の南北幅は広く見積もっても約100m程度ではないかと思われる。

#### 1SD15

この溝は、北側の1SD01に沿う形で走っている。遺構の報告でも述べたとおり、溝自体は、あたかも、小さな土壌が連続するかのような形状をしている。このようなありかたは、多数の人間が横に並んで、一齊に作業をする際に起こりやすいと考えられ、大宰府条坊跡など他の遺跡でもしばしば見受けられる。

溝と集落の位置関係について、検討を加えてみたい。今回の調査地点は、現在の上北島集落の南側にあるが、その間には谷状の落ち込みがある。この落ち込みの南端は今回確認した1SD01である。つまり、落ち込みに接して溝が設けられているものの、溝の南側には現在、集落は展開しないのである。この溝が集落の周囲に設置されたものとするならば、かつて南側に集落が展開したと考えなければならない。もしくは、この溝は集落の周囲に設置されたものではなく、微高地土の土地の水抜きのために地形の変化点付近に掘られた溝に過ぎない、と理解するかのいずれかであろう。

しかし、平行して他の溝も認められることや、1SK35などの土壤の存在を考えると、南側に集落が展開していた可能性は否定できないのではないかと考えている。

#### 1SK08出土土師皿

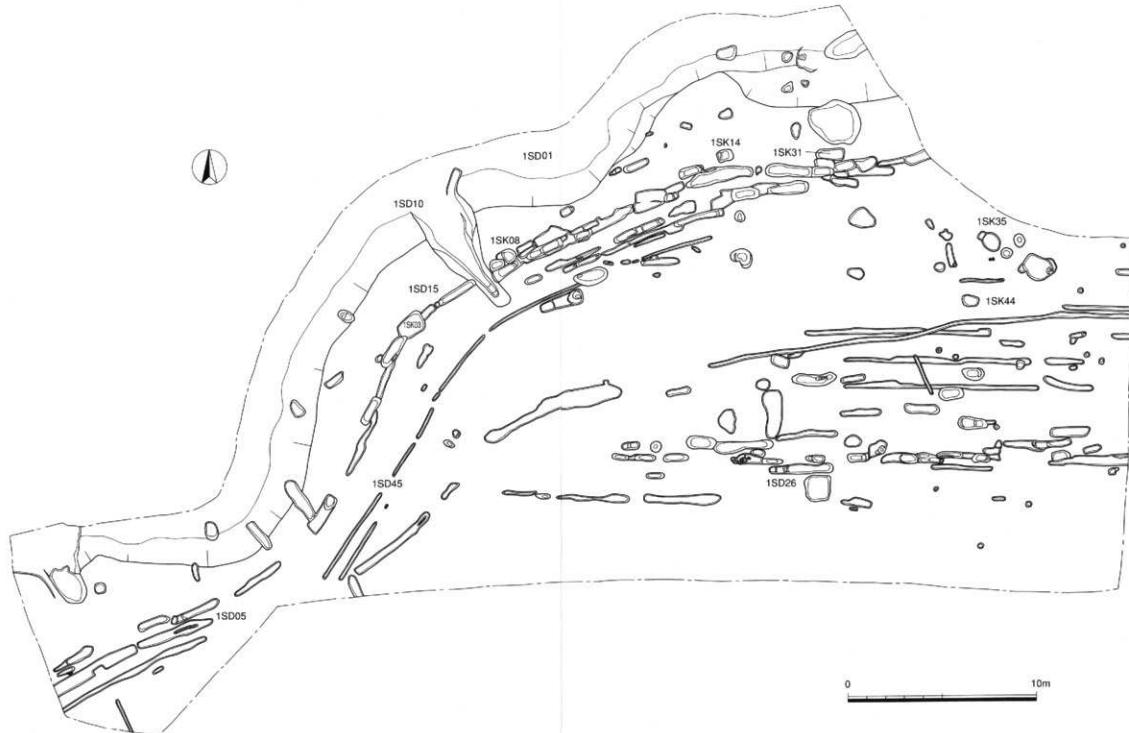
今回の調査では、出土遺物はあまり多くない。その中で1点の土師皿について、若干の担当者の私見を述べておきたい。

1SK08出土の土師皿14は、口縁部の小片であるが体部の断面が肥厚し、菱形状を呈している点に注目している。体部断面が菱形の土師皿は、平安京で14cから16cにかけて存在する所謂「へそ皿」などの京都系土器が知られている。近畿地方では、平安京を中心に周辺地域にも分布することが知られているが、以西では、山口市の大内氏館跡や極周辺に分布することが知られている。また、近年では太宰府市や大分市の遺跡でも京都系土器の出土例が増加しており、もっと広範な分布が想定されつつある。ただし、これらの土器群は、一般に白土器といわれるようになり白っぽい色調が特徴の一つである。しかし、今回報告する資料は、明確に白土器とはいがたく、この点も考慮する必要がある。

今後、類似資料の増加を期待するとともに、平安京並びに山口市内遺跡をはじめとする京都系土器との比較が必要であろう。

今回の調査は、担当者が行政ではじめて経験した調査であるため、その力量の不足はいかんともしがたい。それは、現在なお未熟な自らが顧みても不手際が多々目につく程である。

その中で、筑後市における中世末ごろの集落のあり方について、一定の資料となり得ることができれば、望外の喜びである。今後、周辺で調査の機会に恵まれれば、この地区の中世末の様相が見えてくることだろう。



上北島前田遺跡調査区全体図（1/200）

# 第Ⅳ章 蔵数森ノ木遺跡

## 第2次調査の成果

蔵数森ノ木遺跡が発掘調査されるのは、今回で2回目である。今回の調査は、テニスコート新設に伴う事前調査であるが、第1次調査は筑後北中学校が新規開校するにあたっての事前調査として、昭和62(1987)年度から昭和63(1988)年度にかけて筑後市教育委員会が実施している。

今回の調査は、第1次調査の東側の隣接地を調査しており、双方の調査区はFig.7のとおりの位置関係である。

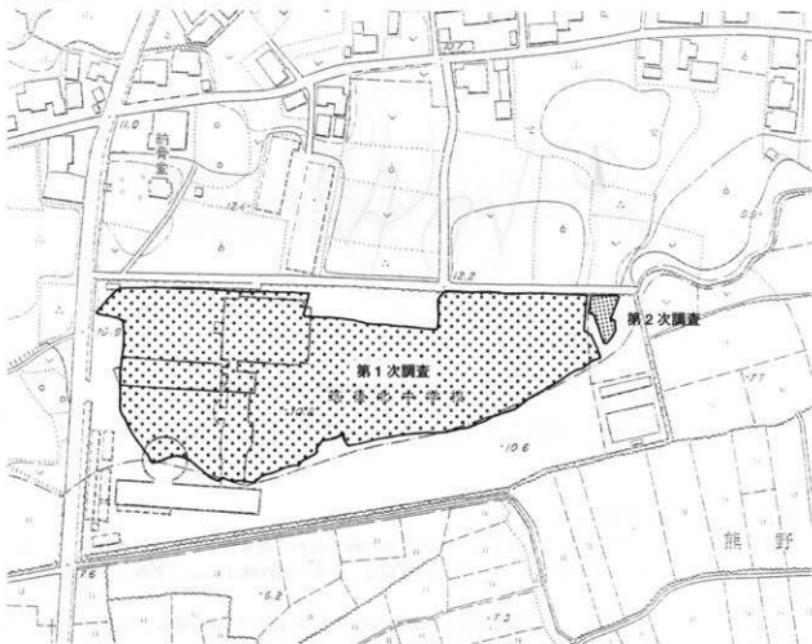


Fig.7 蔵数森ノ木遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

### (1) 遺構

今回の調査では竪穴住居1棟、土塙墓1基、石棺墓1基、石蓋状遺構1基の弥生時代の遺構の他に、縄文時代のものと考えられる落し穴1基と、古墳時代の溝1条を確認した。以下、個別に報告したい。

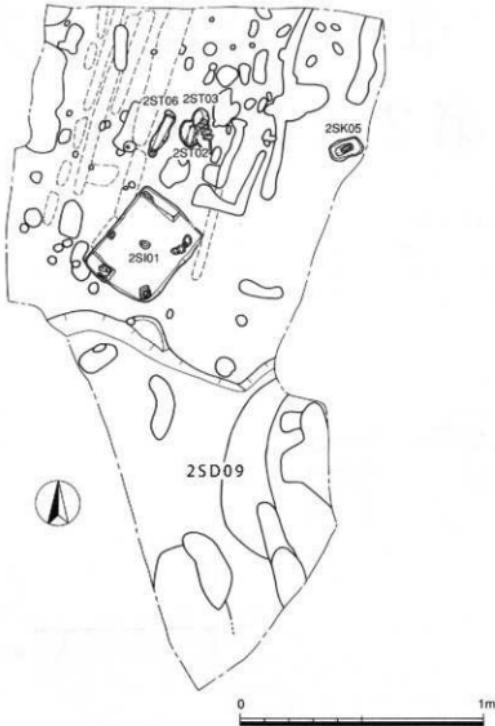


Fig. 8 蔵数森ノ木遺跡第2次調査全体図 (1/200)

#### 竪穴住居

##### 2SI01 (Fig. 9, Pl. 4・5)

調査区のほぼ中央に位置する。平面形は、北東—南西軸が北西—南東軸よりも長い長方形を呈する。主軸（北東—南西）の方位はN-42°-Eである。規模は、北東—南西軸は4.2m、北西—南東軸は3.1m、深さは0.3mを測る。

北隅と西隅に、小さなベッド状遺構を有する。北隅のものは、0.4m×1.7mの細長いもので、西隅のものは0.5m×1.1mのものである。ともに、床面からの高さは0.2mである。

中央に深さ0.3mのピットがあるが、主柱穴は確認できなかった。中央のピットは断面土層をみると、床面使用時には埋められていた可能性が高い。

出土遺物はすべて弥生土器で、大半は住居廃絶後の生活関連廃棄によるものと理解される。

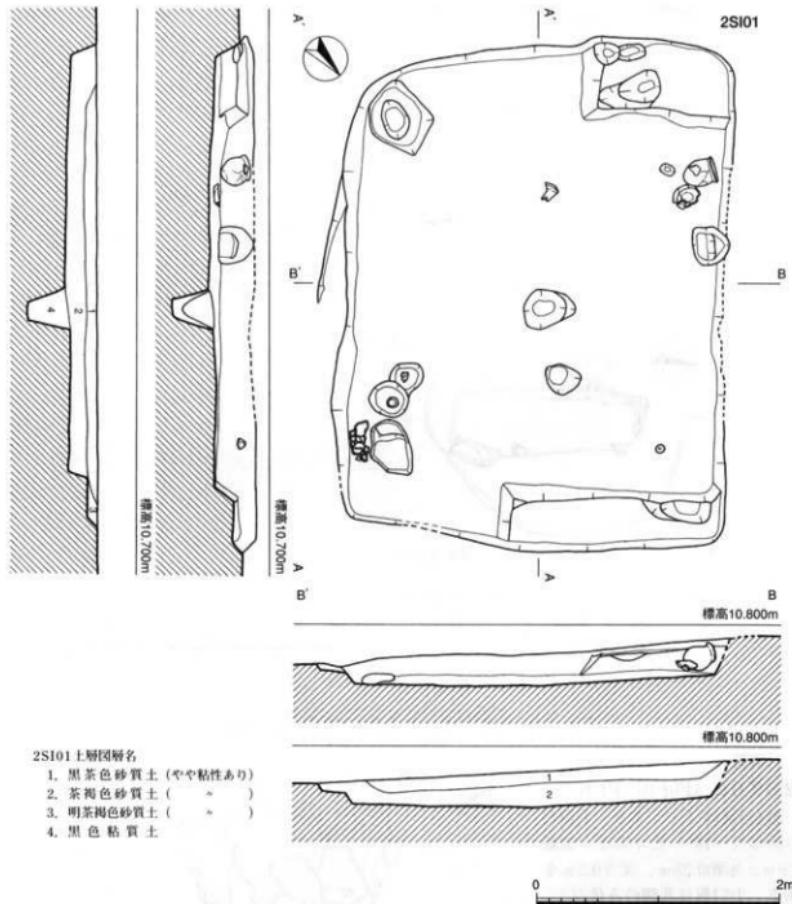


Fig. 9 2S101 実測図 (1/40)

### 土壤墓 2S106 (Fig. 10, Pl. 6)

調査区の北よりにあり、主軸の方位はN-25°-Eである。長軸2.0m、短軸0.4m、深さ0.3mを測るが、南端部は幅0.3mと狭くなる。北端には緑泥片岩の小口板があるが、それ以外には石材は痕跡すら確認できなかった。ただ、南端には東西0.15m、南北0.05mの凹みがあり、小口板の掘方かもしれない。南端の凹みを、仮に小口板の掘方とすると小口板間の長さは、1.50mとなる。北側が幅広であることから頭位は北であると推測するが、人骨はもちろん遺物も出土しなかった。

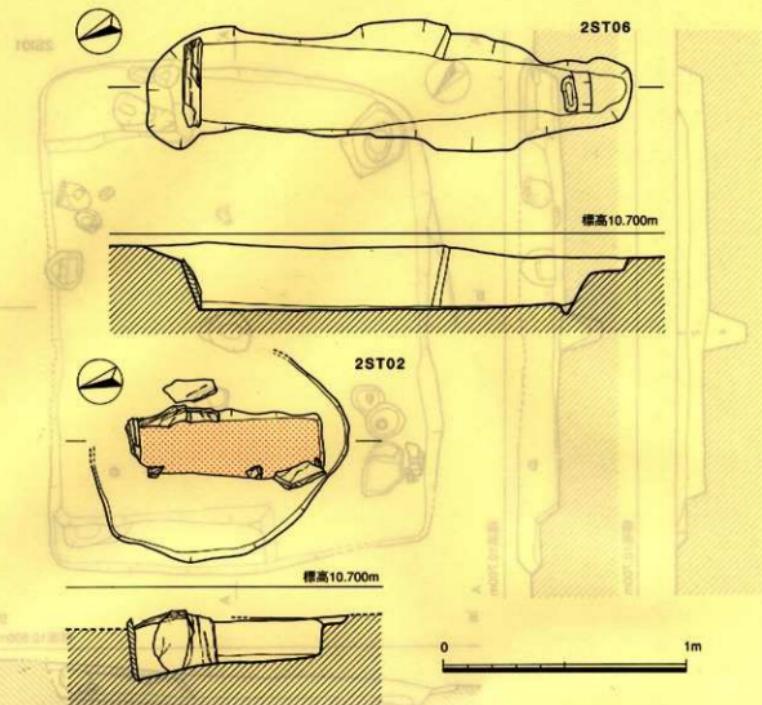


Fig. 10 2ST06・2ST02実測図 (1/20)

#### 石棺墓

##### 2ST02 (Fig.10, Pl.6)

調査区の北よりにあり、主軸の方位はN-16°-Eである。長軸0.9m、短軸0.25m、深さ0.2mを測る。小口板は北側のみ遺存し、側板も東側2枚西側1枚のみがかろうじて残っていた。また、蓋石はすべて失われていた。床面には一面に朱が塗布されているのが確認された。人骨はもちろん、遺物も一切出土しなかった。

##### 2ST03 (Fig.10, Pl.7)

調査区の北よりにあり、2ST

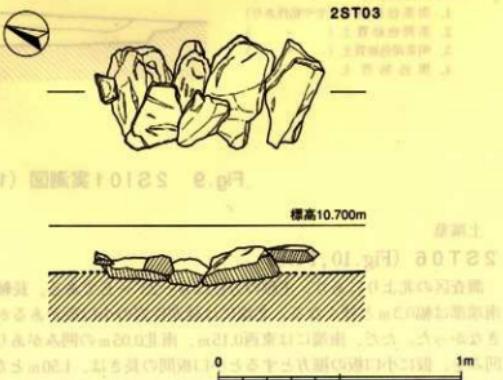


Fig. 11 2ST03実測図 (1/20)

02に隣接する。主軸の方位はN-21°-Wである。6枚の縁泥片岩で、あたかも石棺墓か石蓋土壙墓のような外観をしている。しかし、石材を除去するとすぐに地山面となり、土壙等の施設は確認できなかった。石材以外の出土遺物はなかった。

#### 落し穴

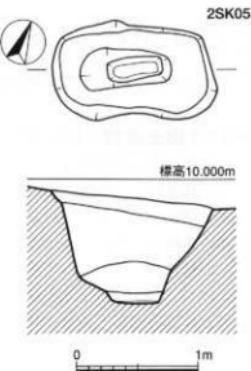
#### 2SK05 (Fig.12, Pl.7)

調査区の東端北よりにある。主軸（長軸）の方位はN-69°-Eである。長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.8mを測る。底面には0.5m×0.2m、深さ0.1mの凹みがあるだけで一般的にみられる小坑は検出できなかった。出土遺物はない。

#### 溝状遺構

#### 2SD09 (Fig.8)

調査区の南側にあり、深さは0.2m程であった。出土遺物に弥生 Fig.12 2SK05 実測図 (1/40) 土器・須恵器がある。



藏数森ノ木遺跡 試掘調査時の状況

## (2) 出土遺物

出土遺物には、弥生土器・須恵器がある。以下、出土遺構別に紹介したい。

### 2S101出土遺物 (Fig.13・14 Pl. 8・9・10)

出土遺物はすべて弥生土器である。1～9は甕で、1・3はほぼ完形に復原できる。1～3は口縁部がくの字状を呈し、口縁端部に面を持つタイプである。体部は刷毛目が認められ、口縁部は横ナデ調整を施している。4は逆L字状の口縁部を持つもので、口縁端部はやや垂れ下がり面をつくる。所謂、須久II式の範疇と理解されるものである。5・6は1～3と同じく、くの字状の口縁部を持つタイプであるが、口縁端部がやや丸みを帯びて面が明瞭でないものである。また、5は体部内面をナデ調整によって仕上げている。6は口縁部が中程で肥厚するタイプである。7は台付甕の底部と思われる。体外面は刷毛目を、それ以外はナデを施す。8・9は甕の底部である。体部内面はナデ、体部外面は刷毛目調整を施すが、8は底部外面に刷毛目を施している。

10・11は大甕で、甕棺用のものであろう。くの字状の口縁部を持ち、口縁端部は明瞭な面に大きめの刻み目が施されている。内外面ともに刷毛目が認められる。なお、10と11は同一個体である可能性が高い。

12～22は壺である。12は短頸壺で口縁部は横ナデ、体部外面は刷毛目調整によっている。13は複合口縁の壺の口縁部で、擬口縁は欠損している。外面は丹塗を施している。14は頸部から大きく外反する口縁部を持ち、口縁端部には明瞭な面を有する。頸部に断面三角形の突帶がつく。15・16は小型の短頸壺である。外方にひらく頑がわずかに認められるが、ほとんど無頑壺のような器形である。口縁部は横ナデ調整によっている。体部外面は刷毛目、体部内面はナデを施すが、16は体部内面の上半部に刷毛目が認められる。17・18は壺の頸部から体部にかけての小片である。17はほぼ直角に屈曲し、頸部は垂直に立ち上ると考えられる。内外面ともに刷毛目を施す。18は14と同様のタイプで、比較的緩く屈曲する。頸部に断面三角形の突帶がつく。19～22は壺の底部である。19は小壺の底部と考えられる。外面はナデ、内面は刷毛目を施す。20～22は内外面ともに刷毛目を施す。外底面は20はナデ、22は刷毛目を施している。

23～26は鉢である。23は口縁端部上面に1条の沈線を施し、器壁が厚い。24は口縁部・内外面ともに横ナデ調整である。25はほぼ完形で、口縁部がくの字状を呈し端部に面をもつタイプである。口縁部は横ナデ、体部外面には刷毛目を施す。底部は内面がナデ、外面が刷毛目である。26は口縁端部が外側に傾斜する面をもつ。口縁部は横ナデ、体部外面は刷毛目を施す。27は完形の小椀で、手づくねである。

28は浅い鉢で、体部上半部が下半部よりも器壁が厚い。口縁部は横ナデ、体部外面は刷毛目、底面はナデをそれぞれ施している。

29は把手ではないかと思われるが、どのような器種の、どの部位かは判然としない。幅約5cm厚さ約1cmの帯を半径約3cmに丸め、本体部分に接合したものと思われる。調整は不明である。

30は高杯の口縁部である。調整は風化が激しく、不明である。

31～33・35は、器台である。31は器台の口縁部である。内面側と外側の2枚の粘土を貼り合わせて、器壁を厚くしている。口縁端部は面をもたせ、やや強めに押さええて沈線状に凹ませている。内面は刷毛目、外面はナデが施される。32は器台の底部である。底部は大きく外方に反っていて、外面に刷毛目を施す。33は斜立するが口縁部を欠く。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。35も器台の底部である。31と同様に、内面側と外側の2枚の粘土を貼り合わせて、器壁を厚くしている。端部は丸くおさめている。

34は支脚の頭部である。調整は横ナデやナデを用いている。

36は甕蓋である。口縁部と体部内面は横ナデを、体部外面はナデを施している。

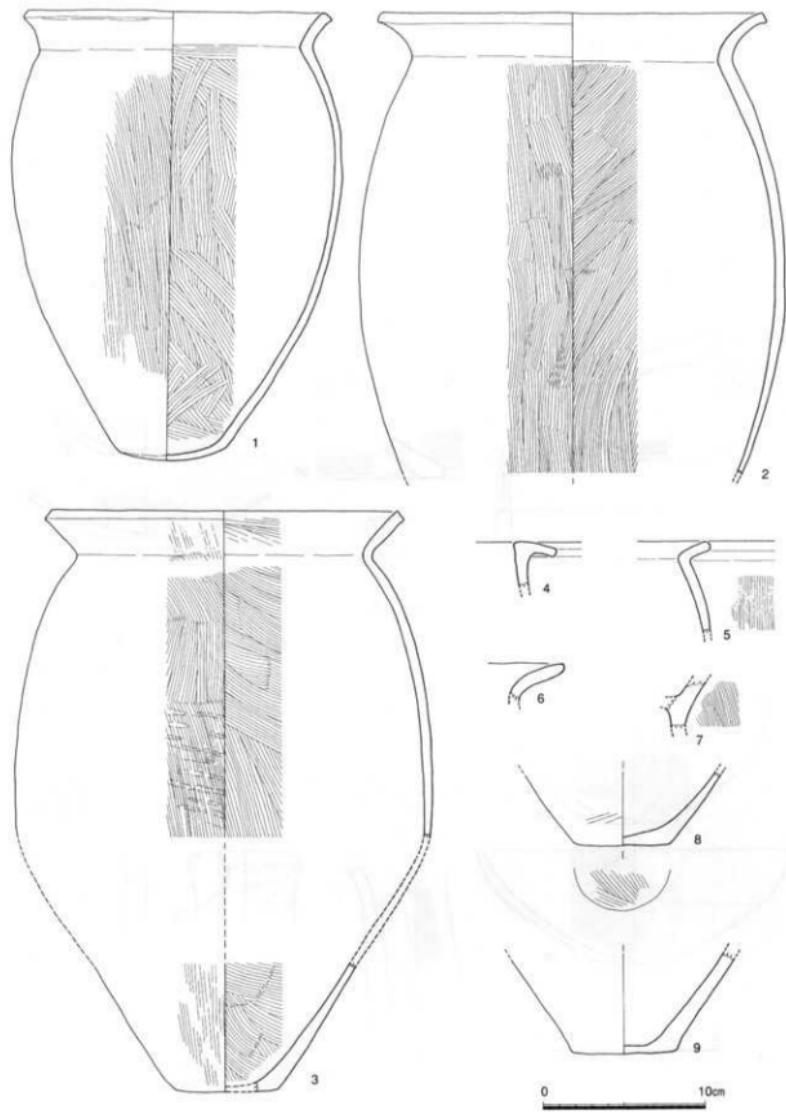


Fig.13 2SI01出土遺物実測図 1 (1/3)

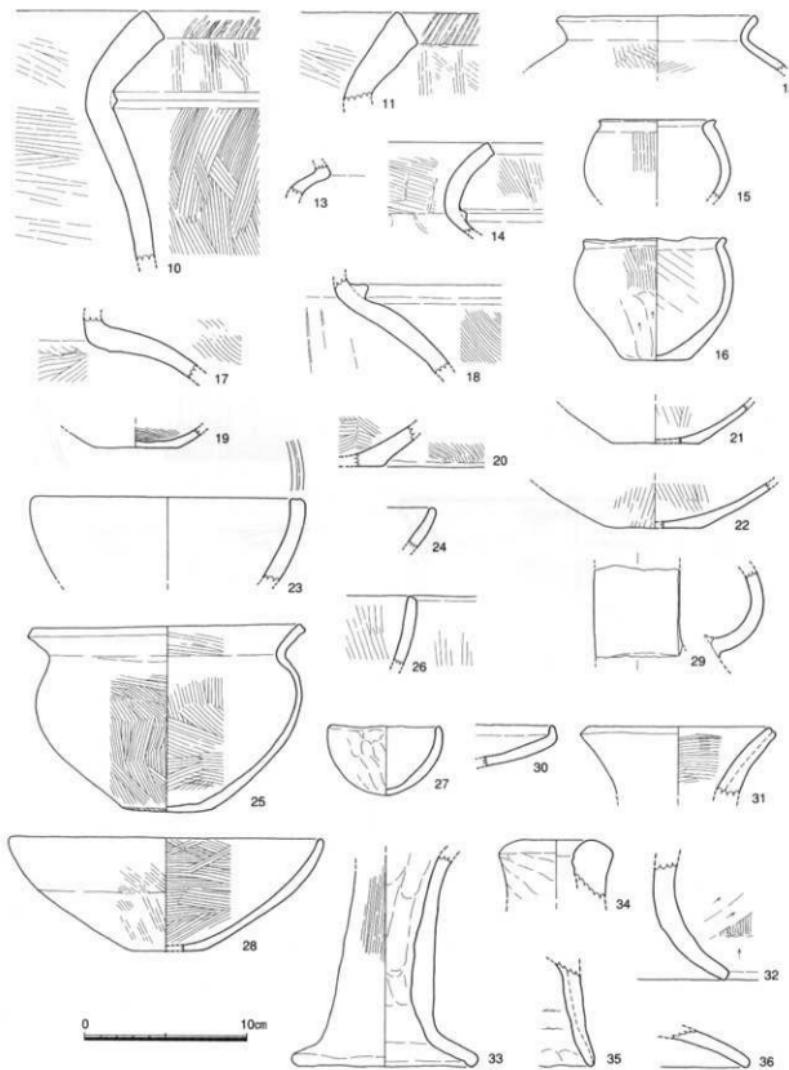


Fig.14 2S101出土遺物実測図 2 (1/3)

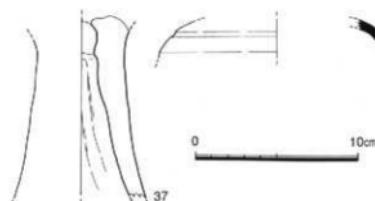


Fig. 15 2SD09出土遺物 (1/3)

### 2SD09出土遺物 (Fig. 15, Pl.10)

弥生土器と須恵器がある。37は、弥生土器の高環の脚部ではないかと思われる。外面はナデを施し、内面は絞り痕が認められる。38は須恵器の环蓋である。内外面ともに横ナデを施し、体部外面に沈線が1条ある。

No.	遺構	種別	器種	口径	底径	最高	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部状	備考	R.No.
1	2SD01	弥生	甕	19.0	6.5	27.8	ほぼ完形	横ナデ	刷毛	刷毛	ナデ	ナデ	灰茶褐色	砂粉多	ほぼ良	くの字状 縁部に油	黒帯2ヶ所有	1
2	2SD01	弥生	甕	24.0	—	—	1/3	横ナデ	刷毛	刷毛	—	—	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	縁部に油	外底部に薄く焼付着	4
3	2SD01	弥生	甕	22.0	6.4	36.0	ほぼ完形複	横ナデ	刷毛	刷毛	ナデ	ナデ	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	くの字状 縁部に油	縁部に叩き痕が残る	25
4	2SD01	弥生	甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	刷毛	刷毛	—	—	灰茶褐色	砂粉少	良	L字状	口縁部表面に凹を持ち、やや崩れ下がる	31
5	2SD01	弥生	甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	刷毛	ナデ	—	—	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	くの字状	—	13
6	2SD01	弥生	甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	—	—	—	—	暗褐色	砂粉少	ほぼ良	くの字状	—	8
7	2SD01	弥生	白耳甕	—	—	—	底部小片	横ナデ	刷毛	—	横ナデ	横ナデ	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	37
8	2SD01	弥生	甕	—	6.0	—	底部1/2	—	刷毛	ナデ	ナデ	刷毛	暗褐色	砂粉多	ほぼ良	—	—	10
9	2SD01	弥生	甕	—	6.6	—	底部小片	—	?	ナデ	ナデ	ナデ	茶褐色	砂粉多	ほぼ良	—	—	18
10	2SD01	弥生	大甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	刷毛	刷毛	—	—	茶褐色	砂粉多	ほぼ良	くの字状 縁部に油	口縁部に別々目あり	11
11	2SD01	弥生	大甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	刷毛	刷毛	—	—	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	くの字状 縁部に油	口縁部に別々目あり R-11と同一?	35
12	2SD01	弥生	甕	12.4	—	—	口縁部小片	横ナデ	刷毛	刷毛	—	—	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	くの字状	—	7
13	2SD01	弥生	甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	丹墨	横ナデ	—	—	茶褐色	砂粉少	良	外縁全塗	—	36
14	2SD01	弥生	甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	刷毛	刷毛	—	—	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	くの字状 縁部に油	縁部に炭化帶有	14
15	2SD01	弥生	小甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	刷毛	刷毛	—	—	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	直	内外面とも化粧土を施す	32
16	2SD01	弥生	小甕	8.8	4.3	7.5	ほぼ完形	横ナデ	刷毛	刷毛	ナデ	ナデ	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	くの字状	—	26
17	2SD01	弥生	甕	—	—	—	底部小片	—	刷毛	刷毛	—	—	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	29
18	2SD01	弥生	甕	—	—	—	底部小片	—	刷毛	ナデ	—	—	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	底部に炭化帶有	—	28
19	2SD01	弥生	甕?	—	5.0	—	底部小片	—	ナデ	刷毛	刷毛	ナデ	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	34
20	2SD01	弥生	甕	—	—	—	底部小片	—	刷毛	刷毛	刷毛	—	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	21
21	2SD01	弥生	甕	—	—	—	底部小片	—	?	刷毛	ナデ	?	乳茶褐色	砂粉少	やや不良	—	—	20
22	2SD01	弥生	甕	—	—	—	底部小片	—	刷毛	刷毛	ナデ	ナデ	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	19
23	2SD01	弥生	甕	16.5	—	—	口縁部小片	横ナデ	ナデ	横ナデ	—	—	茶褐色	砂粉少	ほぼ良	くの字状 縁部に油	口縁部上面に 油膜1条有	27
24	2SD01	弥生	甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	—	—	茶褐色	砂粉少	やや不良	縁部に油	立柱に油	30
25	2SD01	弥生	甕	17.1	5.6	11.8	ほぼ完形	横ナデ	刷毛	刷毛	ナデ	ナデ	灰茶褐色	砂粉少	良好	くの字状 縁部に油	—	2
26	2SD01	弥生	甕	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	刷毛	ナデ	—	—	茶褐色	砂粉少	良	—	えんじます	12
27	2SD01	弥生	小甕	6.8	—	4.3	完形	手づくね 手づくね	手づくね 手づくね	手づくね	手づくね	手づくね	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	やや内削	—	5
28	2SD01	弥生	甕	19.4	5.0	7.0	口縁部小片	横ナデ	刷毛	刷毛	刷毛	ナデ	灰茶褐色	砂粉多	ほぼ良	弱やかに 内削	体部中位で緩やかに 内削	6
29	2SD01	弥生	把手?	—	—	—	1/2?	—	?	—	—	—	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	24
30	2SD01	弥生	高環	—	—	—	口縁部小片	不明	不明	不明	—	—	灰茶褐色	砂粉少	やや不良	上方へ 傾曲	—	15
31	2SD01	弥生	高環	12.0	—	—	口縁部小片	横ナデ	ナデ	刷毛	—	—	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	上方へ 傾曲	口縁部に沈線状の 凹みあり	16
32	2SD01	弥生	器台	—	—	—	底部小片	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	22
33	2SD01	弥生	器台	—	—	—	下半部	—	刷毛	ナデ	ナデ	ナデ?	茶褐色	砂粉多	やや不良	—	斜立する	3
34	2SD01	弥生	支脚	7.0	—	—	底部小片	横ナデ	ナデ?	?	—	—	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	17
35	2SD01	弥生	器台	—	—	—	底部小片	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	—	—	23
36	2SD01	弥生	蓋	—	—	—	口縁部小片	横ナデ	ナデ	ナデ	—	—	灰茶褐色	砂粉少	ほぼ良	弱やかに 内削	—	9
37	2SD09	弥生	高環?	—	—	—	脚部1/2?	—	ナデ	絞り痕	—	—	灰茶褐色	砂粉多	やや不良	—	支脚?	33
38	2SD09	須恵	环蓋	—	—	—	体部小片	横ナデ	横ナデ	—	—	—	青色	青色	良	—	体部外側斜面に 沈線1条	38

Tab. 2 藏数森ノ木遺跡出土遺物観察表

### (3) 小結

藏敷森ノ木遺跡第2次調査では、竪穴住居と墓壙を確認することができた。以下、いくつかの点について考察を加えてみたい。

#### 竪穴住居

今回の第2次調査では、1基のみを確認した。この竪穴住居は第1次調査の報告書でのV期にあたると思われる。この段階の集落は、東と西の2つのグループにわかれていた。いうまでもなく今回の竪穴住居は、東側のグループにはいる。また、平面プランが同じV期の222号住居に酷似している点も注目される。方位もほぼ一致する。

ただ、竪穴住居としては、この集落のはば東限にあたると思われる。このことは、東側が谷地形となる地形の変化を考えあわせても符合する。

#### 墓壙

石棺墓、石蓋土壙墓はいずれも弥生時代のものと考えられるが、出土遺物がなく時期の確定には到らない。これらの墓壙は竪穴住居と同じく、第1次調査の墓域に連続するものである。第1次調査では土壙墓・石蓋土壙墓が確認されているが、今回の調査結果で、石棺墓というスタイルもバリエーションの中にあるということが確認されたことになる。

また、2ST03は石蓋状遺構として報告しているが、検出時には、石棺墓あるいは石蓋土壙墓であると考えていた。しかし、石を除去してみると、すぐに暗茶色の地山となり、石材はおろか土壙等の掘込みも確認できなかった。地山に酷似した埋土で、検出が困難であった可能性も否定できないが、調査時の所見としては、下部施設はないと判断している。

この特異な施設は、埋葬対象になりうるもののが何らかの理由で失われていたため、上部施設である石蓋のみを設置した可能性を考えておきたい。ただし、類例調査等は極めて不十分である点をご容赦願いたい。

今回の調査は、300m<sup>2</sup>という非常に狭い範囲での調査ではあったが、第1次調査の成果とあわせて考えると、当地方の弥生時代の集落の在り方を考える上で貴重な資料となりうる。今後の集落論、土器編年の進展を期待したい。

# 写真図版

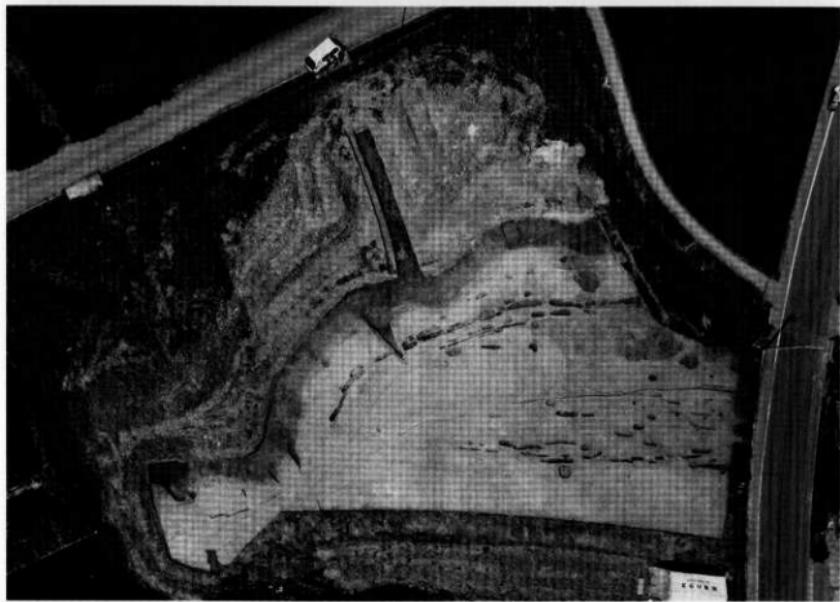
# PLATE

## 凡 例

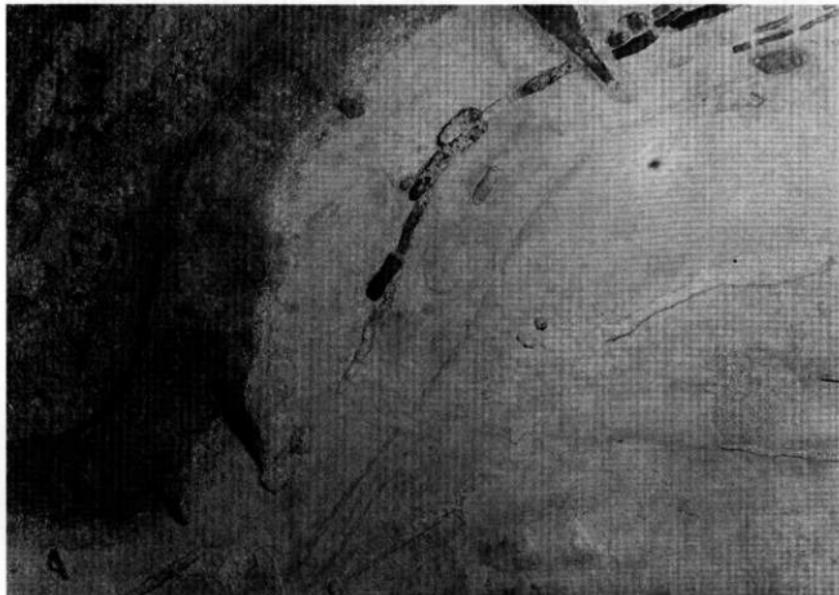
遺物図版の遺物番号は、本文中の各遺跡毎の遺物番号と一致する。



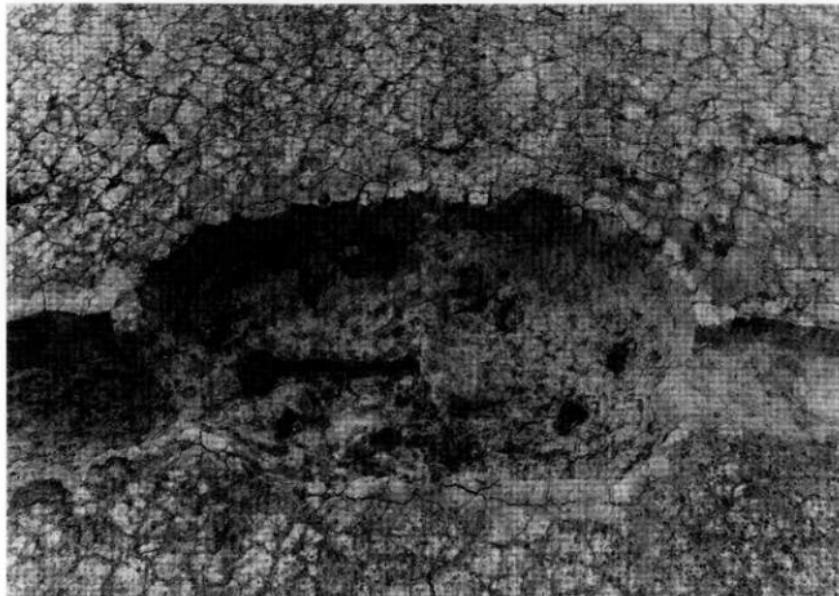
上北島前田遺跡調査区全景（空中写真・北西から）



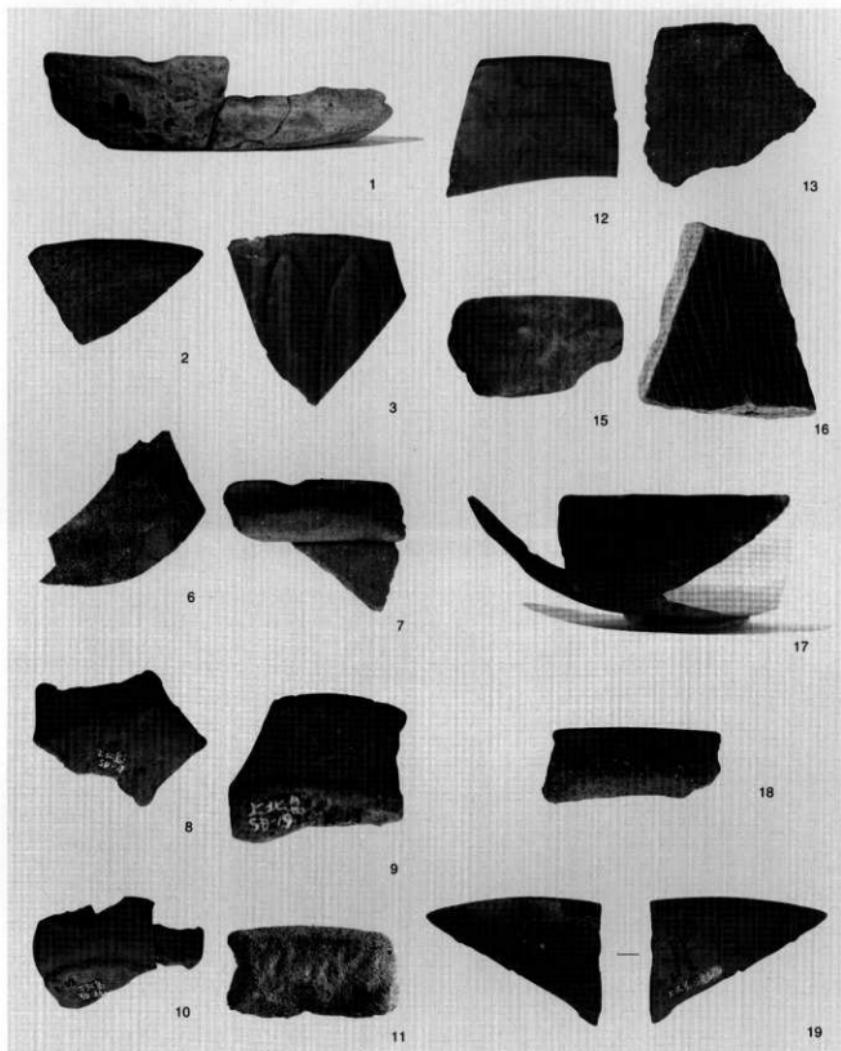
上北島前田遺跡調査区全景（空中写真・上が北）



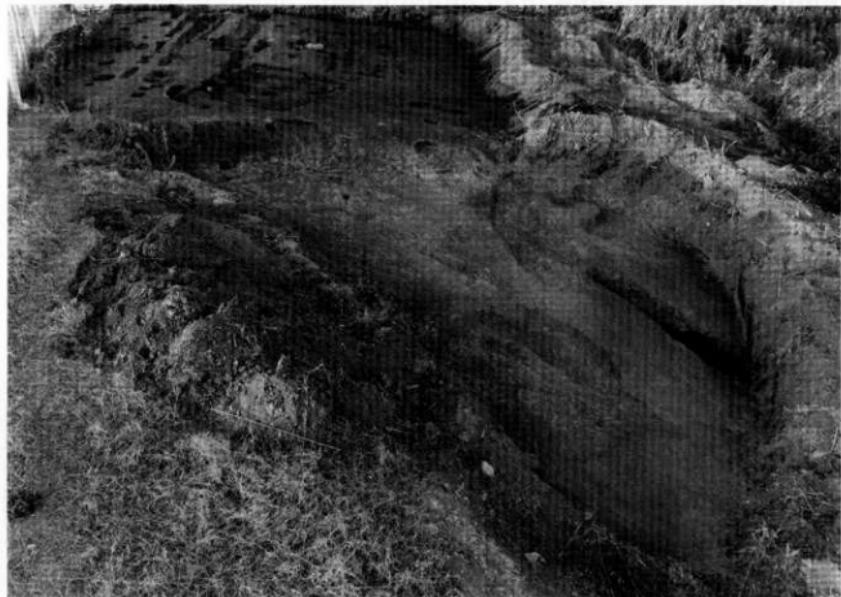
上北島前田遺跡 1SD05 1SD15 1SD45 (空中写真・上が北)



上北島前田遺跡 1SK03 (南東から)



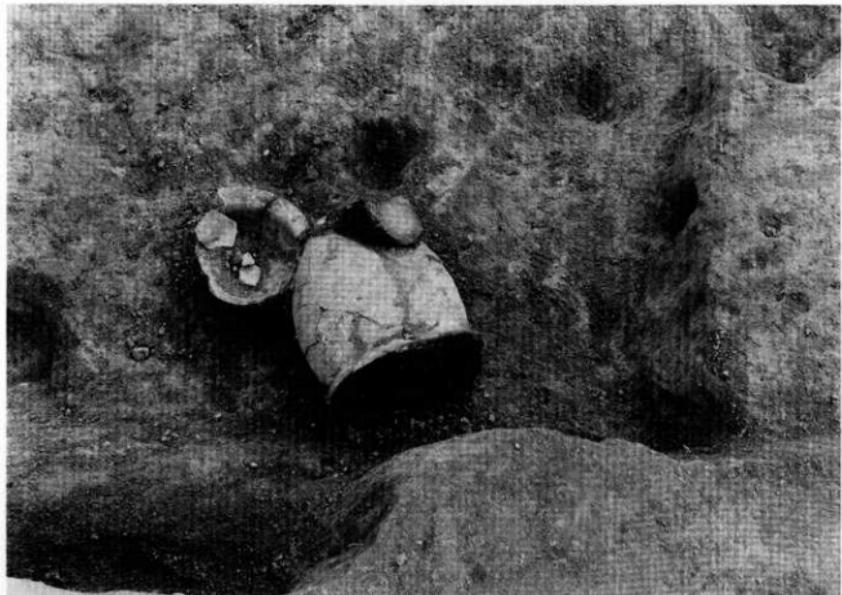
上北島前田遺跡出土遺物



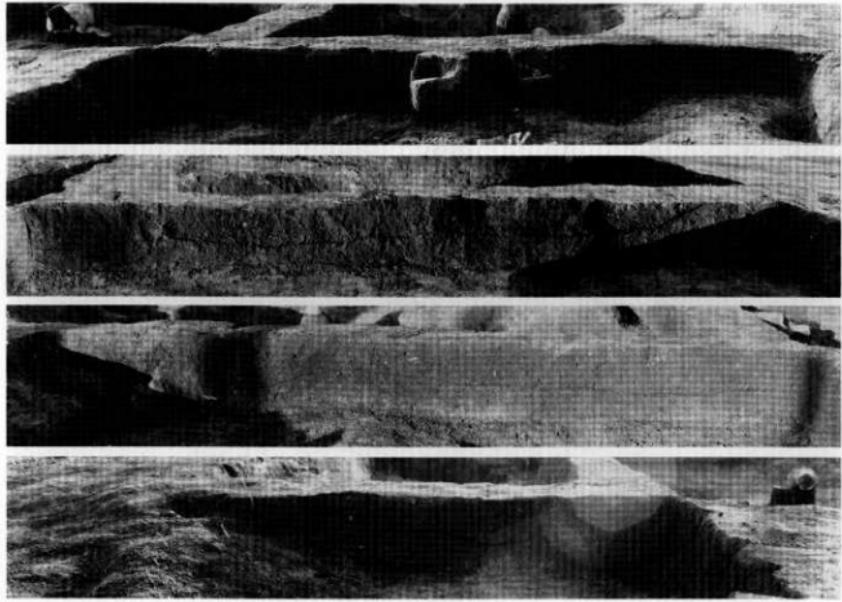
藏数森ノ木遺跡第2次調査区全景（南から）



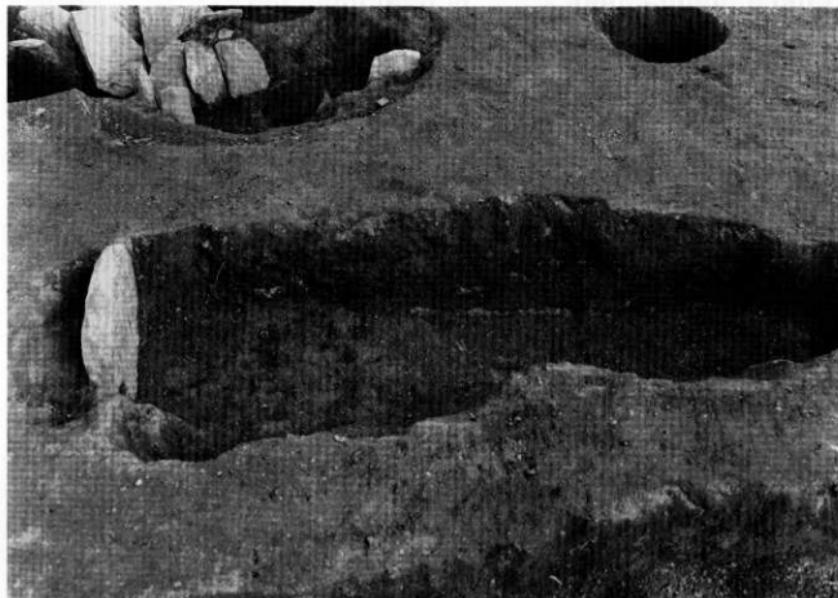
藏数森ノ木遺跡2SI01（南東から）



藏数森ノ木遺跡 2SI01 遺物出土状況（北西から）



藏数森ノ木遺跡 2SI01 土層断面（上から A、A'、B、B'）



藏数森ノ木遺跡2ST06（西から）



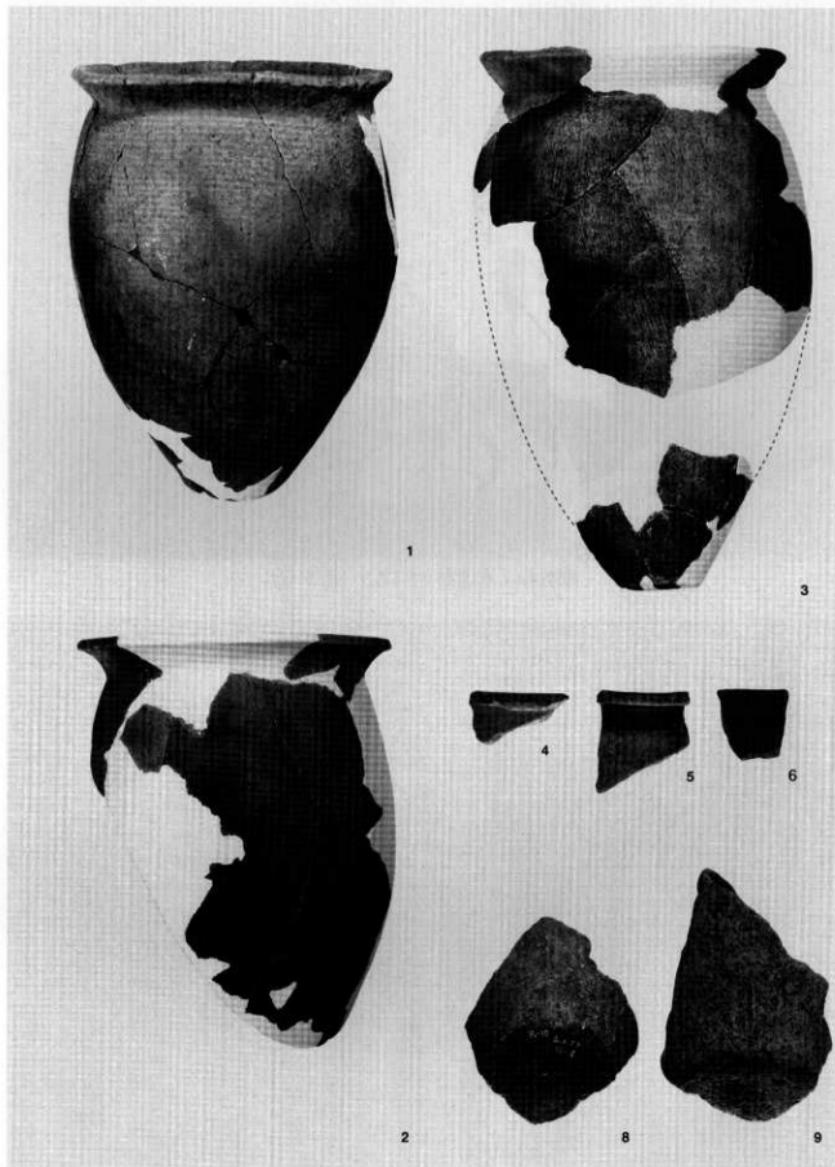
藏数森ノ木遺跡2ST02（西から）



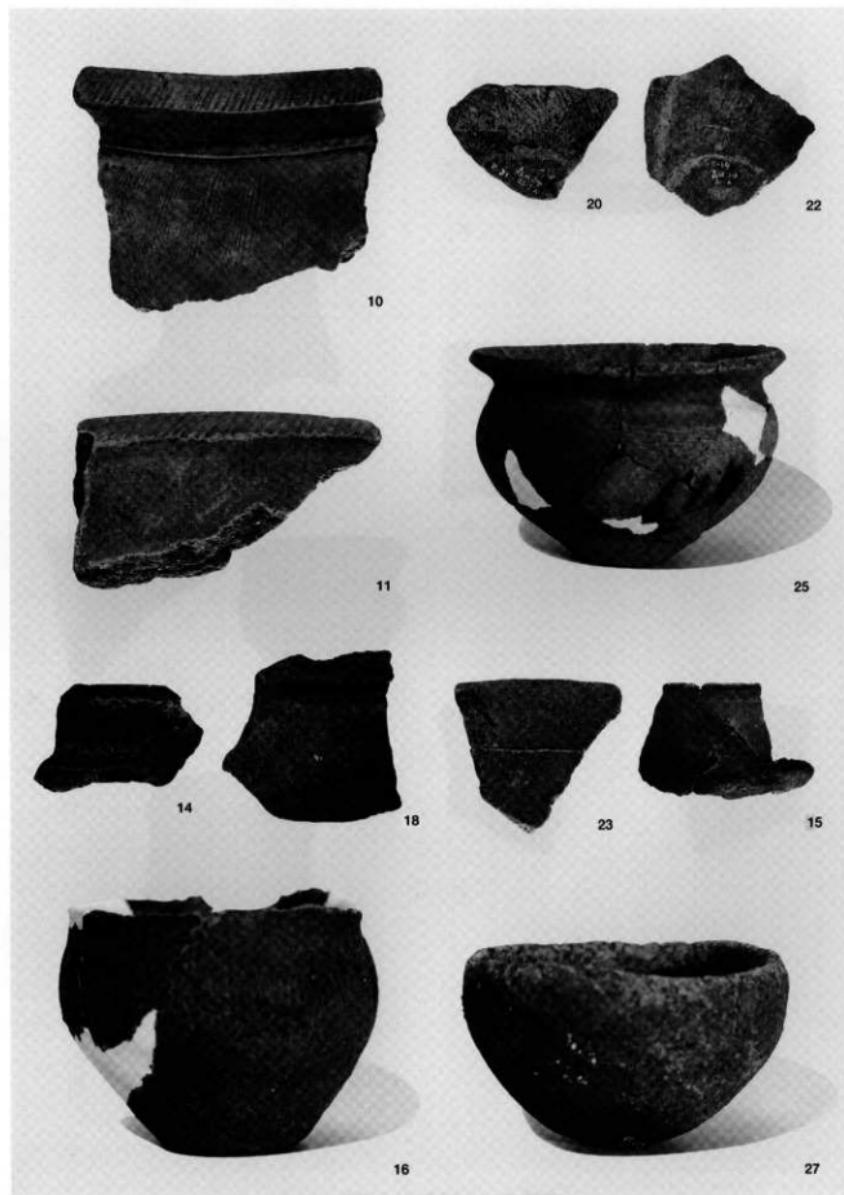
蔵数森ノ木遺跡2ST03（西から）



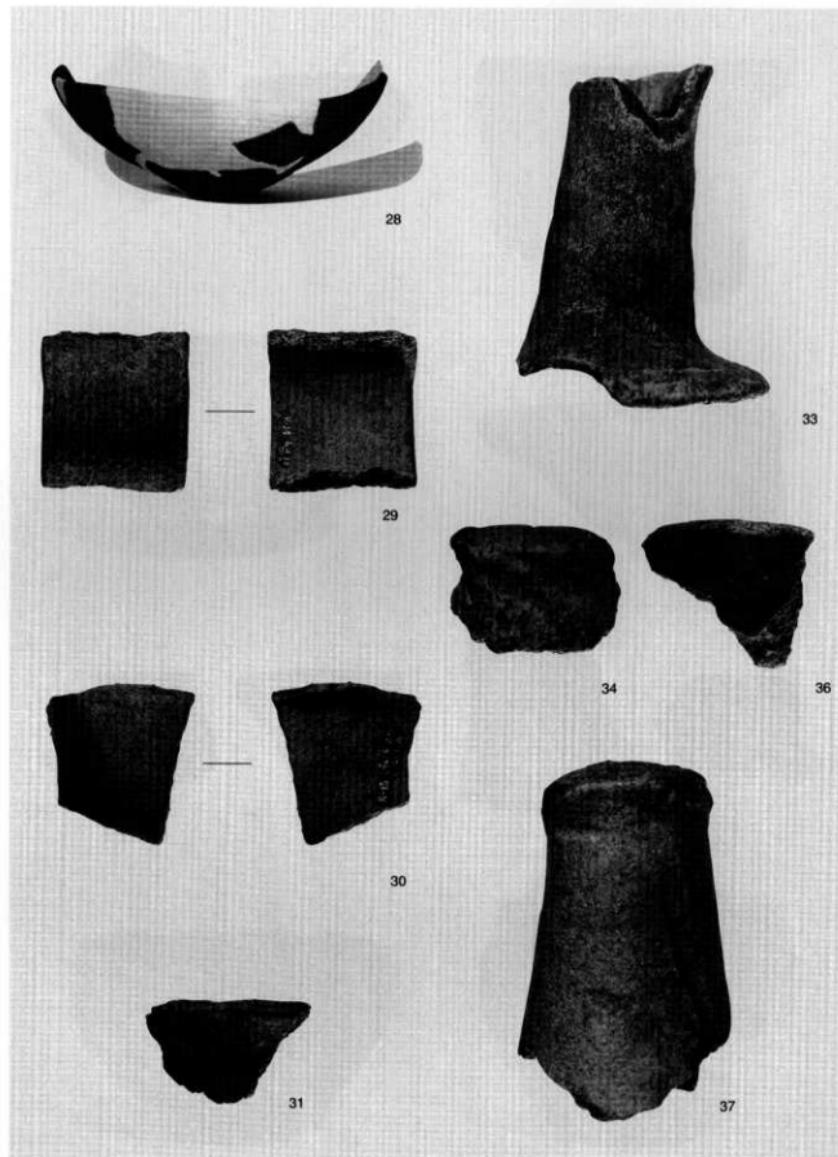
蔵数森ノ木遺跡2SK05（北から）



藏数森ノ木遺跡出土遺物 (1)



藏数森ノ木遺跡出土遺物 (2)



蔵数森ノ木遺跡出土遺物 (3)

## 筑後市内遺跡群

筑後市文化財調査報告書

第20集

平成11年3月

発行 筑後市大字山ノ井898

筑後市教育委員会

印刷 福岡市中央区渡辺通2丁目9-31

アオヤギ株式会社